

大 博物館



津山郷土博物館

だより



てつ じ がね
鉄 地 金 津山市狐塚遺跡25号住居址 7世紀頃 津山市教育委員会蔵

狐塚遺跡25号住居址埋土から出土した鉄地金である。方形で扁平な鍛造品で、長さ7.1cm、幅4.7cm、厚さ2.3cm、重さ234g。時期は7世紀初頭頃。鉄製品を製作するための素材と考えられる。古墳時代の鉄素材としては鉄錠が著名であるが、これは主に朝鮮半島からの輸入品と考えられる。国産の鉄素材としては5g前後の鉄塊状遺物を想定する意見があるが、本例のような鉄素材は類例に乏しい。

狐塚遺跡は津山市押入の丘陵上にある集落跡で、1973年津山市立東中学校校舎建設にともない、発

掘調査が実施された。検出された遺構は、竪穴住居24棟、建物遺構11棟である。うち建物Ⅲには鍛錬鍛冶炉が伴っている。遺跡からの出土遺物には、須恵器、土師器、羽口、炉壁片、鉄芯滑石製紡錘車、鉄鉱石、鉄滓などがある。鉄滓には鉱石製錬滓と砂鉄製錬滓を含んでいるので、調査区外に製鉄炉が存在する可能性がある。とすれば、本遺跡は製鉄から鍛錬鍛冶まで一貫操業を行う製鉄集団の集落ということになる。遺跡の年代は出土須恵器から7世紀初頭頃と考えられる。

1

『日本靈異記』下巻第13話に「法花経を写さ将として願を建てし人、日を断つ暗き穴にて、願力に頼りて、命を全くすること得る縁」と題する、次のような説話が載せられている。

考謙(称徳)天皇の時代、美作国英多郡に官営の鉄山があった。国司が役夫10人を使って鉄穴で採掘していたところ、落盤事故があり、一人の男が生き埋めとなってしまった。圧死の知らせを受けた、男の妻子は悲しんで観音の図像をつくり、写経をおこなって7日が経過した。一方、穴の中の男はかねて発願している法華経の写経ははまだ完成していない。もし命を永らえることができるならば必ず成就したいと祈願した。するとそのとき、人指指ぐらいの穴が開いて日光がさしこみ、その隙間から観音の化身である一人の僧が入ってきて「汝の妻子が私に飲食を施して、私に汝を救わせた」といって食物を与えて立ち去った。しばらくして、2尺(60cm)四方、長さ5丈(15m)ほどの穴が天井まで通じた。ちょうどそのとき、30人余りの山人が葛を取るため鉄山に入ってきた。その人影をみた穴の中の男は大声で助けを求めた。そこで山人たちは葛で縄と籠をつくり、男を地上に引き上げた。助けられた男からこの話を聞いた国司は、大層感動して、知識を結成して男のかねての発願であった法華経の書写を完成させてやった。

以上の物語は、8世紀後半の考謙(称徳)天皇の代、美作国英多郡の官営鉄山の落盤事故で生き埋めとなった一人の男が仏教信仰により奇跡的に救出されたとする内容のものである。物語の主眼は仏教の因果応報を説くことにあり、そのすべてを史実とみることはできない。しかも、この説話は唐の『冥報記』上巻第8話とモチーフが極めて類似している。その『冥報記』の概要は次のとおりである。

東魏(534~550)末の頃、都の人が西山に入って銀砂を採取していた。仕事を終えて穴を出ようとしたとき、落盤事故が起こり一人が生き埋めとなってしまった。崩壊箇所には日光の差し込む小さな穴が空いていたが、男は脱出することもできず、ただ一心に念仏を祈るだけであった。圧死の報を受けたその

父は、子の死体を捜す手立てもなく、しかも貧乏であったので、その菩提を弔う法要をおこなうこともできなかった。そこで父は粗末な食物をもって寺に詣で、最も簡素な法要の執行を依頼した。ところが、美食に慣れた僧侶たちは粗末な食物に見向きもしなかった。父が泣き悲しんでいると、一人の僧侶が哀れんで食物を受け、まじないを唱えてくれた。すると、その日のうちに、穴の中の男のもとに一人の僧侶が現れ食物を与えた。それを食べた男は二度と飢えることなく、ひたすら仏を念じつづけた。10年余りのち、北斉の文帝(550~560)が即位して、西山に涼殿を造ることとなった。そのため工匠らが大岩を取り除くと、穴の中で人が生きているのが発見された。生還した男を迎えた父母は大層喜び一族をあけて仏教に帰依した。

以上のように、二つの説話に共通性のあることは一見して明らかである。『日本靈異記』は薬師寺の僧景戒が弘仁年間(810~823)頃に編纂したもので、その序文にも記されているように、653年頃に編纂された唐の『冥報記』を参照している。したがって、『日本靈異記』下巻第13話は『冥報記』上巻第8話の翻案とみなすべきであろう。しかし、それは因果応報の仏教思想を説くためのモチーフを借用したのであって、それ以外の説話の内容は景戒自身によって構成されたとみてよい。そこで注目されるのが、『冥報記』が東魏末の首都近郊での銀砂採取中の事件とするのに対し、『日本靈異記』は奈良時代の美作国英多郡の官営鉄山での事件としていっていることである。前者から後者を机上の作業のみで念出することは困難であろう。とすれば、実際にそこで落盤事故が起こったかどうかは疑問としても、8世紀後半の美作英多郡に国司の経営する鉄山があったことは認めてよいだろう。

2

では、美作国司の経営する鉄山とは一体いかなる性格のものであろうか。『延喜式』巻24主計上によれば、美作国から調として鍬・鉄の貢納が定められている。また、平城宮跡・京跡からも、美作国英多郡大野里から鉄(『平城京木簡一』)、同勝田郡和气郷から鉄(『平城宮出土木簡概報12』)、英多里から鍬(同)を貢納する木簡が出土

しており、うち和気郷の鉄は調と明記されている。このような状況からすれば、『日本靈異記』に記される美作国英多郡の官営鉄山とは、調鉄を都に貢納することを目的とするものと考えてよいだろう。

次に、『日本靈異記』の説話によると、男は深い穴に閉じ込められたとされているので、その鉄山の操業形態は砂鉄採取ではなく、地下穴を穿つての鉱石採取と考えられる。岡山県の鉱石を原料とする製鉄については、総社市千引カナク口谷遺跡で6世紀後半～末頃の製鉄炉(『奥坂遺跡群』総社市教育委員会)、真庭郡落合町須内遺跡で6世紀末～7世紀前半頃の鍛冶炉(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』)、津山市狐塚遺跡から7世紀初頭頃の鉄鉱石と鉱石製錬滓(『狐塚遺跡発掘調査報告』津山市教育委員会)、同築瀬古墳群から6世紀後半頃の鉱石製錬滓(『築瀬古墳群』津山市教育委員会)が検出ないし出土している。岡山県においては、6世紀後半頃の製鉄確立以降、砂鉄製錬と鉱石製錬が並存したことは明らかである。このような状況からすれば、8世紀後半の美作英多郡に鉱石製錬の原料となる鉄鉱石採掘穴の存在を想定することは不自然ではないだろう。

3

美作国司の経営する鉄山の所在について、『日本靈異記』には英多郡部内とあるのみで、詳細な地名を記さない。『和名類聚抄』等によると、英多郡には英多・江見・吉野・大野・讃甘・大原・栗井・広井・檜原・林野・巨勢・川会の12郷があり、その郡域は現在の大原町・作東町・美作町・英田町・勝田町・東栗倉村・西栗倉村の5町2村に及んでいる。したがって、国司経営の鉄山をこのうちのどこかに想定することが可能であるが、その具体的な所在を確定することは現状では不可能である。しかし、若干の手がかりがないわけではない。

それは、先にもふれた平城京跡出土の木簡である。

「美作国英多郡大野里鉄一連」(『平城京木簡一』)
これは平城京跡左京三条二坊のいわゆる長屋王邸の東辺部の南北溝 S D4750から出土したもので、美作国英多郡大野里から貢納した鉄一連の貢進物付札である。単位が連とあるので、この鉄は製品ではなく鉄素材と考えられる。かつ和銅6年(713)備前国から美作国が分国し、靈龜元年(715)里が郷と改められているので、この木簡の年代は713年から715年の間である。大野里の擬定地については、『東作誌』吉野郡大野保条に川上・

滝・田井・桂坪・赤田・立石・野形・小房の8村が記され、とりわけ川上村の古名を大野村とされていることから、現在の大原町川上を中心とする地域と考えられる。したがって、8世紀初頭の英多郡大野里内で都に貢納する鉄素材を製作するための鉄製錬がおこなわれ、さらにはその原料となる鉄採鉱が実施されていたことを推測することが可能である。その製錬の原料が砂鉄か鉱石か不明であり、かつ『日本靈異記』から知られる8世紀後半の英多郡鉄山と8世紀初頭の大野里の例をただちに結びつけることには慎重であらねばならないが、一つの可能性として『日本靈異記』の英多郡鉄山を現大原町川上周辺に擬定する案を提出しておきたい。

4

すると、次の問題は、大原町川上周辺に古代の鉄鉱石採掘場が存在するかどうかである。日本の製鉄においては、近世以降は砂鉄を原料とする、いわゆるたたら吹製鉄法に一元化され、古代に確実に存在した鉱石製錬法は中世以降ほぼ消滅してしまった。したがって、古代の鉄鉱石採掘場が現代人に認識しやすい状態で残存していることはありえず、人里離れた山深くに埋もれているか、もしくは鉄以外の別の鉱石採掘場となっているかである。

そこで、筆者の注目するのが大原町川上に所在する金谷鉱山である。これは川上川源流に近い標高約450mの谷底にある鉱山である。『東作誌』大野保川上村条に「金山」として、「往古銅山あり。鉱数カ所にあり。此谷奥、上村分にも銀鉱あり。慶長の頃まで銀を出す。森忠政侯、入国後國中を巡視し、此所に至り聊の銀を得るを以つて金汁作物に害ありとて停止せられしと云ふ」とある。それによれば、金谷鉱山は慶長年間(1596～1614)以前に遡る銀・銅の鉱山で、津山藩主森忠政の執政期(1603～1634)に農作物に被害があるとの理由で廃止された。その後、明治12年(1879)に採鉱が再開され、昭和33年(1958)に休山となり、現在に至っている。鉱種としては金・銀・銅・鉛・亜鉛・硫化鉄鉱がある(同和鉱業株式会社柵原鉱山所資料による)。

以上、『日本靈異記』の英多郡鉄山から出発して、大原町川上の金谷鉱山にまで議論が及んだ。その間、憶測に憶測を重ねたきらいもあるが、今後の保存の問題もあり、あえて試論を提出した次第である。

(湊 哲夫)



博物館のひとこま

「岡山の方は、標準語に近いらしいよ」という言葉を唯一の手掛かりに、関東出身の私が津山に突然やって来て、あの小雨のそほ降る四月よりここ津山郷土博物館でお世話になり、もう二年が経とうとしています。その間色々なことがありましたが、いまだに数多くの失敗をしながら、騒がしく館内を走り回っています。

ドキドキと緊張しながら市役所で辞令の交付を待っていた時、「もちろん社会人になるからにはビシツとスーツで決めて…」と、思いかっちり装着していましたが、意外に他の皆さんは案外軽装。あれ、来ることを間違えたのか？しかし、すぐに疑問が解消されました。博物館に着いて、「明日からは、きたない汚れても良い服装でよろしい」と、館長よりの有り難いお言葉が…。それ以降、学生時代に逆戻りした汚い格好で博物館に現れていることは、言うまでもありません。

「博物館の仕事でなぜ汚い格好なのか？」皆さんは、不思議に思われるのではないのでしょうか？博物館の仕事は、大まかに分けて収集・保管・整理・展示・教育・普及・調査・研究となり、けっして、受付でチケットや図録の販売をしているだけではないのです。

私の受け持ちは、収集・保管・整理の一連の流れの中にあり、ダイレクトに寄贈・寄託者の方々の蔵や屋根裏などから持ち込まれた年代物の埃と紙魚との奮闘により成り立っています。仕事を始めた頃は、紙魚一匹に大騒ぎしていましたが、今では紙魚が歩き回った机の上で、お弁当を食べられる位までに成長しました。何とも、慣れとは怖いものです。

しかし、真っ先に新しい収蔵物に触れられる特権は、何物にも代え難いことも事実ですが、日がな一日椅子に座って整理作業をしていると、必然的に慢性的な運動不足になり、一日に三千歩程しか歩かなかった日もある程でした。そこで、健康の為に津山市の散策をしようと思立ち、万歩計を買って早速歩いてみることに

しました。

しかし、地理が全く分からない。さらに、地名も分からない。美作エリアの地名毎に資料を整理する時には、林田を「ハヤシダ」、中和村を「ナカワムラ」と、迷答を続出させた程です。ですから、万全の備えで「津山市文化財地図」、「津山の文化財」（両方とも博物館にて販売中）を持って出掛けました。この時の私の移動法は、ただ自らの二本の足のみ。そして、分からなければ道で聞く。このことを基本に散策をしてみると、なかなか歩いている人に出会わない。そして、出会ってもお年寄りの津山弁はかなりきつく、お互いの意志の疎通が難しい状態。そう言えば、博物館での電話や受付でも、聞き取りが出来ないときがたくさんありました。

そして、やっと道を聞くことの出来る人に出会い道を尋ねると、「あ、ここから右手へ十分位じゃ」しかし、津山の地理は城山を中心にしないと分からない近世の人の様な私。「城から見て、どっちですか？」と、すかさず聞くと「おおおお、城からじゃと西側の方じゃ」折角親切に教えて頂いたこの言葉に大きな落とし穴があったことに、その時は全く気が付きませんでした。

歩きだしてから、十分経ち、二十分経ち…。しかし、一向に目的地に着きません。そして、たまたま前方から来た方に再び道を尋ねると、「あんたそんなもんじゃ着かんよ。車で行っても、もうちつとかかるじゃろう」そうです。以前聞いた情報は、徒歩ではなく、車での道程だったのです。

しかし、ここまで来て引き返すのも何なので、その後一時間程散策して目的地に辿り着き、しっかり見学してきたことは言うまでもありません。

そんなこんなで、大騒ぎの毎日ですが、今後とも頑張ってお仕事をしたいので、皆様方よろしくお願い致します。そして、皆様方が博物館に見学にいっしょにやることを心よりお待ちしております。（Y.J.）

博物館入館案内

- 開館時間：午前9：00～午後5：00
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：小・中学生 100円（80円）
高校・大学生 150円（120円）
一般 210円（160円）
※（ ）は30人以上の団体

博物館だより No.25 平成12年1月1日発行

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ㊟(0868)23-9874
印刷：(株)廣陽本社

大 津山松平藩の楨印で剣大といひ、現在津山市の市章となっている。